

(8月号続き) くれたへ これで十年祭すゞやかてけた ざくろふであつたへ さしづへ さしづけつこふとおもふてこそけつこふ へをもわんから さしずわしやま」(117ウ) になるへ 一人二人の里わいらん とをしてなりと国々までとをりてきた さしすからてたもの 十年あと一ツの里わらんから さしすわしやまになる さしずしやまになれば すつきりさしすわせん 十のものなら一ツももちいられん さしすにまたかさか かゝりたる 里にふゑたる これたけの事 ゆゑばわかるやろ みなちからとこにある ちからあればわかる ちからないから」(118オ)

わからん ちからないもの八とふもしやない あすからのこりせきしてしもふ すつきりしてしまふ ミなへいさんでかやすでへ いなしてしまふ これたけさしづしてをいたらわかる くさりたさしすも をきてくる日かある こんなさしづかと 三寸そとへハきかさせんやろ かゝみやしきに さしずハすこしわじやまにならせんか やれへよふたすけきてくれたへ」(118ウ)

やれへらくになつた

(注) おさしづ書では「明治29年3月21日 夜8時50分 刻限」である。

45 三月廿七日 夜八時刻限

アゝへかたいへへ かいぬまたへかたいものにある くるふでへ とんととんならん もふへくるしむよふなもの どんならんへ まあへはしめかけたへ 世界の事もあつたりできた とんな事もはなせへ はなしあいたたけてわなんにもならん これ」(119オ)

をこふしたとゆふきまりたはなしわない それがとふもならんへ なれとこれからわこふときまりはなしわない それがとふもならんへ なれとこれからわこふとゆふきまりた事わない それやからけさのかゝりわ 身上すつきりのよふにおもい これであつたつたと はたへみゑてあつたやろ まためいへもそふおもふた かゝみやしき さあはしまりかけた」(119ウ)

さあうれしいな ひるから八とふやろふ すこしわあるふなれと たんとわないやろふ ゑらいぬへきたのふ まふこれゆふているまに それへめゑがでかける てかけたら一日もはよふなあへ 事情をさつして心をくんで 道をはやくあけてやれへ もふなにもかもさしづ通り あくあかんわ二だんにしてみよ よかつたらしよかひの里にさためてくれ (120オ)

(注) 明治29年3月27日のおさしづ。

46 同廿七日 夜 平野権 胸ノせまり二付御願

あんせる事わいらんへ ぐるりからミなせまりたる そふやによつて はやくへ道をへ ほんの一こと一寸といたるから 此里にもとづいてくれ ながへのみちでありたやろ いまゝでハおもててたけで 心にわからんたやろ なにもおもふ事いらん よふしやんしてみよ たねをゝろしてをいて ことしハよふてきたへ これよふきゝ」(120ウ)

わけて たのしめへ ふそくおもいかけたら なんほてもふそくおもわんならん 三十日ためしてくれ そふしたらすみかや わかりたらふそくもいらふまい よろこぶ里をはやへいそいでへ こふてありました これからわへこふなります さきわこふなりますと 一ツへくゝりの里をそなへにやならん (121オ)

47 明治廿九年九月八日 吉岡榮藏妻さと三十三才 身上御願 さあへたづねるじ上へ 身のところでわ心ゑん いかん事

上たすねる とふゆふ事である とふゆふものである 日々の事上である このじ上よふきゝわけにや わかりがたない 人間それへなからへて じ上の里わ心にもつて じ上だんへ日からたあたる事上のところ」(121ウ)

よふきゝわけにやわかりがたない よふおもてみよ これたけの事あるふか これたけのじ上 日々の事上 これだけありそふなもの 日々の処どふもしるしない とふ一ツきゝなをしとりなをし もふ身上たいへん 事上一時であるまい なれと内々しやん定めてくれ 日々いんねん事上 いんねんさとす所せかい又内々一ツきゝわけ あいそつ」(122オ)

かしやない よふきゝわけてくれよふ

48 明治廿四年十月廿九日 瀬戸新七倅吉藏 身上御願

さあへ身上の処 たづねるじ上 一時の処では 何かの処わかるまい 身の内不足どふてある みちへとおもふ処 内々わかるまい わからんければよふきゝ」(122ウ)

わけて事情さとれ 一時の処になりて どふとさらへもたづ一寸はむつかしい事である なれど なにもむつかしい事はない 身の内わからん事ない 心だいときゝわけ めんへなす事ならんハ よふきゝわけ あざやかならにやならん よふきゝわけ ならんやない なれとならんといふは 心あとやさ」(123オ)

きなんたるり さらへもたづ いんねん事情さとす里から、うちへあらためばならん事あるふまい よふきゝわけてくれるよふ これ一ツさとしおくによつて

49 明治廿三年九月廿三日 小梶与兵衛三十六才 身上御願

さあへ第一身上、事情尋ねる 長らへて」(123ウ)

どふも一時身上ふ足なりて 一時といふ たいていはなしの里もきかしてある 身の処とふいふものと思ふ 長らへてしんしんすれども 身上の処とふゆふものと思ふへは一ツの里であるふ よふきゝわけ 親が子供にくい親はあるふまい 助からにやならんか一ツの里 それに身上ならん 云ふはよふきゝわけ めんへの上ほと大事なものはあるふまい 大事な身上ふ足なるは いんねん一ツの里 いんねんの」(124オ)

里といふてはわかるまい わからんから たんのふ一ツの里が第一 世上の里をみてたんのふと心定めるなら 前世一ツのさんけとなる よくきゝとつて さとしてくれ (124ウ)

(125ウ) は白紙。このあとに、おふでさきのお歌が記されている。最初は、九号36下の句。以下、九号36上の句、九号35下の句、九号35上の句、九号34下の句、九号34上の句、九号33下の句、九号33上の句とあって、続いて、上の句と下の句が逆になって、九号31、30と記される。

(127オ) は白紙。続いて、八号86—81が同様に上下逆に記されている。さらに、八号75、64—61、59—58、54、52、37、33—30、10—7が記載されている。最後の八号7のみ、上の句から書かれている。

吉岡辰蔵「神様一条御嘯之写」(明治23年4月)の翻刻は以上である。長々と「おさしづ」の翻刻を試みた。このほとんどは『おさしづ』書に掲載されているものであるが、その本文において、かなりの違いを認めるものもあり、ほぼ正文と同様のものもある。この翻刻の意図は、こうした「おさしづ」の写しが、いろいろなところに見受けることができるが、その分布を考えるための基本としたいとの思いから、試みたものである。

もちろん、吉岡辰蔵氏のこうした「おさしづ」の写しは他にもあるが、とりあえず一番古いもの、というところでのこの写しを選んだものである。